

氏名	西 紋 孝 一		
学 位 の 種 類	医 学 博 士		
学 位 授 与 番 号	乙 第 1819 号		
学 位 授 与 の 日 付	昭和62年 9 月30日		
学 位 授 与 の 要 件	博士の学位論文提出者（学位規則第 5 条第 2 項該当）		
学 位 論 文 題 目	精神疾患における DST の臨床的意義		
論 文 審 査 委 員	教授 庄盛敏廉	教授 森 昭胤	教授 大田原俊輔

学 位 論 文 内 容 の 要 旨

精神疾患におけるデキサメサゾン抑制試験（DST）の臨床的意義を検討するために、正常対照群21名および精神障害群 238 名に対して DST を施行し、次のような結果を得た。

DST 施行後の血清コルチゾール値および DST 陽性率は、

- 1）精神病像あるいはメランコリーを伴う大うつ病エピソード群（いわゆる内因性うつ病）に特異性の高いものではなく、精神疾患における DST の診断的有用性はあまり期待できない。
- 2）各精神疾患、特に内因性うつ病および精神分裂性障害において、ともに病状の重症度と密接な関係を示し状態依存性指標となる。
- 3）精神病像を伴う大うつ病エピソード群で顕著な異常反応を示し、「視床下部－下垂体－副腎皮質系」の機能異常をより強く示唆する。また、精神病像を伴う大うつ病エピソード群は臨床的に老年期の妄想性障害と鑑別を困難とするが、後者では DST は正常対照群および他の非内因性精神疾患と同様な反応結果を示し、DST はその鑑別には十分に参考になり得る。

以上のように、DST は精神科領域において数少ない補助的な検査として利用され得るが、今後さらに他の生物学的な指標と組み合わせることにより、種々の精神疾患の病態、診断、治療および予後などの研究に大きく寄与すると考えられる。

論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨

本研究は、精神疾患の内分泌学的診断法を検討したものであるが、デキサメサゾン抑制試験が今までいわれていたように疾病特異的なものではなくて、むしろ状態依存性指標として利用したり、他の生物学的指標と組み合わせたりしたほうが精神医学に寄与するのではない

か，という従来示唆されていなかった重要な知見を得たものとして価値ある業績であると認める。

よって，本研究者は医学博士の学位を得る資格があると認める。